記憶の彼方

茜　風緋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
記憶の彼方

【Ｎコード】
Ｎ５０６８Ｈ

【作者名】
茜　風緋

【あらすじ】
或る日ハヤテとナギはいつものようにケンカをしていた。そんなときにハヤテの目の前に歩が表れた。そして、その後訪れる不幸な運命とは！？

遠来の詩

ある夏が終わりかけの晴れた日のこと。此処、三千院家では今日も
小さな主が
機嫌を損ねていた。
「ふんだ。ハヤテのばか！」
何やら、あまりいい雰囲気ではない。
「お、お嬢様・・・」
彼女は三千院ナギ。この三千院家じき頭首の１３歳の少女。
そして、機嫌の良くないお嬢様に困っているのは、彼女の執事
綾崎ハヤテ。彼は、両親の残した借金によって、ヤクザに渡されて
しまったのだが
そのときに助けてもらったのがナギである。
なので、こうして執事をしているわけなのだが、
今から３０分前のことである・・・
「お嬢様、朝食の時間ですよ。」
「う、うん。ふぁあ。おはよう。」

「はい、おはようございます。では、お嬢様。」

ハヤテがナギを起こしに行ったとき、問題は生じた。

「ではお嬢様、お着替えです。僕もお手伝いします。」

「ふぇ？お、お手伝いって・・・お前。わかっているのか！？」

「はい。何か問題でも？」

「問題って・・・お前、私のは、裸姿を見てもなにも思わないのか？」

「え？何がですか？」

その言葉で彼女は激怒した。

そして、今の状況なのである。

「って、ことなんですよ。マリアさん。

僕、どうしたらいいですかね。」

それを聞いて半分呆れるマリア。

「もう、ハヤテ君は、本当に鈍感ですねぇ。

少しは乙女心ってものに理解は無いんですか？」

「乙女心ですかぁ・・・」

ハヤテはそういうものについては鈍い。いや、疎かった。

「まぁ、今日は休日ですから。少し外にでも行って

女の子に付いて勉強でもしていたらいかがです？

ナギの機嫌もなかなか直りそうにありませんし。」

それに渋々ではあるが同意せざる負えなかった。

「そ、そうですね。では、少し外に出かけてきます。」

そういうとハヤテは自室に戻り私服（？）に着替えた。

いや、正確に言うとこれもナギから至急された物なので

私服では無い。

「よいしょっと。」

小さめのショルダーバッグをもってハヤテは出かけた。

三千院邸を出たあたりからハヤテはふと思った。

「しかし、女の子を勉強と言っても何をしていいものか。」

そういいながら歩き続けると、彼はばったり知り合いの女性に出会った。

「あれ、ハヤテ君じゃない。どうしたのかな？こんなところで。」

「あ、こんにちは。西沢さん。」

西沢　歩である。彼女は、ハヤテの辞めてしまった高校の

元クラスメートである。普通であることが特徴で何か

特筆するようなものは無いのだが、ハヤテへの想いは

他を潰えぬほど強い。

一度ハヤテに告白しているのだが、振られている。

しかし、今こうして仲良くしていられるのも彼女が未だ

ハヤテのことを想っているかもしれない。

「いえ、実は・・・と言うわけなんですよ。

ですので、ちょっと、乙女心を勉強しに。

しかし、何をしていいか分からなくて。」

このとき歩の脳裏にピカっと電球がついた。

ーーーーこれはもしかして神様が私にくれたチャンスなんじゃない

かな？かな？ーーーー

「は、ハヤテくん！！そ、そしたら、私で良ければ力になりたいんだけど・・・」

「本当ですか？ありがとうございます！！」

ハヤテと歩は一緒に町に出かけることになった。

「ですが、何をしていいのか・・・」

ハヤテにとって乙女心とは何か理解できないものだった。

「じゃ、じゃあこれから私とで、デートなんてどうかな！？」

思い切って歩はハヤテに言ってみた。

ーーーーう、う～ん。勢いで言っちゃったけど、きっと断られるよね。ーーーー

そう思っていた矢先ハヤテはその予想を裏切った。

「デートですか・・・そうですね。分かりました。

勉強だと思って、今日は一日、西沢さんをエスコートさせていただきます。」

ーーーーえっ？嘘。ハヤテ君とデート？や、やった！！で、でもどうしよう・・・ーーーー

いきなりのことで多少困惑している歩。そこに、

「じゃあ、西沢さん。行きましょうか。」

ハヤテが話しかける。

「え？あっ、はい！」

こうして、二人はデートすることになった。

最初に二人が向かったのは、服屋だった。

すると、歩が、

「見て見て、これなんてハヤテ君にぴったりじゃないかな？」

歩がそう進めた。

「い、いやぁ、こんないい服。僕にはちょっと・・・

それよりも、これなんて可愛くて西沢さんにお似合いじゃないですか？」

「へ？か、可愛い？」

歩が頬を赤く染める。

「はい。西沢さんにぴったりですよ。」

「そ、そんな、照れちゃうよ。ハヤテ君ったら・・・」

ーーーーどうしよう。ハヤテ君に可愛いだなんて・・・ーーーー

彼女の口元が緩んでいた。

「あの？西沢さん？大丈夫ですか？」

「へ？あ、あ。うん。」

ハッとなる歩。

ーーーーいけない。せっかくのチャンス。これは物しなくては。ーーーー

「と、ところでハヤテ君。わ、私ちょっと水着が見たいんだけど、少し見てくれないかなぁ？」

「え？み、水着ですか？・・・分かりました。

では向こうに行きましょう。」

二人は水着売り場まで歩いた。

「へぇ～、やっぱりシーズンが終わっちゃうと少し値段が安くなってるんだぁ～。」

値札を見て歩が行った。

それを見たハヤテは、

「えっ！？これって、安くなってるんですか？」

「うん。これだと、多分3割くらいは安くなってると思うよ。」

「なるほどぉ、水着ってこんなに高いんですね。」

と、そこに店員がやってきて

「いらっしゃいませ。あの、お客様。何かお探しものですか？」

「いえ、別に探し物ってほどではないのですが

水着を見ているだけ何です。」

「あらあら、では試着をされてはいかがですか？

そちらの彼氏も見てみたいですよね。」

店員はハヤテに振った。

「か、彼氏って僕のことですか？

え～っと、はい。そうですね。」

同意するハヤテ。

「彼もそういってますしね。どうですか？」

ーーーーは、ハヤテ君。「彼氏」ってことに反論していなかった・・

・ーーーー

そんなことを悶々と考えていた歩に

「では、お客様こちらへどうぞ。

彼氏の貴方は、少しほかの服を見ていてくださいな。」

「えっ、あ。はい。分かりました。」

そして、試着室に歩は入って行った。

使用中ですとカーテンに刺繍がしてある。

「はぁ、彼氏、か。」

ハヤテもその言葉を少し考えていた。

――――僕は、あの時アーたんにどうして

あんなことを行ってしまったのだろう・・・――――

ふと、脳裏に幼きころの自分が映った。

――――もしも、あの時あんなこといいさえしなければ・・・――――

そう思うと胸が痛んだ。

お店の中と言うことも忘れ、自然と頬に涙が流れていた。

――――僕は、僕はなんて愚かなんだ。あんなことを言ったせいで

大好きな人を傷つけてしまった。ーーーー

自分に悔いるハヤテ。

そこに

「お客様。彼女の試着が終わりましたよ。」

店員に声をかけられ、ハッとした。

「あ、あれ。此処は・・・」

「何を言っているんですか。今、試着が終わったので

どうぞ。」

その伸ばされた手の先には、なんとも愛らしい水着を着た

歩が立っていた。

「あ、あの、ハヤテ君・・・どうかな？

に、似合ってるのかな・・・」

歩の質問にハヤテは

「はい。とっても綺麗ですよ。西沢さん。

まるで、人魚姫に会ったみたいです。」

「い、いやだなぁ・・・恥ずかしいよぉ。」

そう言うと、歩はカーテンを閉めようと、手を伸ばした。

しかしハヤテが、

「待ってください。西沢さん。・・・もう少し、もう少しだけ見ていたいのですが。

駄目でしょうか・・・」

「え？・・・は、はい・・・でも、あんまり見つめないでね・・・」

ーーーーは、ハヤテ君、どうしたんだろう。もう少し見たいだなんて。ーーーー

うれしさと恥ずかしさが頭の中で渦を捲いていた。

しばらくハヤテが見ていた。

「・・・ありがとうございます。西沢さん、とても綺麗だったので

つい見惚れてしまいました。」

ーーーーみ、見惚れる！？ハヤテ君が私に・・・ーーーー

歩の頭で幸福感が溢れていた。

「もういいかな？・・・じゃ、じゃあ着替えるね。」

カーテンを閉めいそいそと着替えを始めた。
しばらくした後、歩が出てきた。
そこに店員。
「お客様、どうでしたか？彼氏の方は
貴方に釘付けのようでしたが。」
「く、釘付けですか！？
う～ん。どうしようかな・・・
また、今度見に来ますね。」
そういうと、ハヤテのほうを向いて
「さぁ、行こうか。」
と、一言。
ハヤテも「はい。」と言い二人は
店を後にした。
店を出たあと二人は噴水のある公園へと向かった。
ーーーーハヤテ君、どうしたんだろう。なんだか、やけに大胆だ

ったような・・・ーーーー

そんなことを思っているとハヤテが。

「西沢さん。さっきの水着姿、本当に可愛かったです。

なんだか、本当の彼女とデートしているみたいで嬉しかったです。」

ハヤテがニコっと言った。

「へ？ほ、本当の彼女みたい・・・？」

「えぇ、本当はあのまま潮見高校にいて、西沢さんに

告白されていたなら、きっと・・・」

ーーーーえっ！？ーーーー

歩がドキッとした。

「すみませんでした、あの時は。

ああいうことは初めてだったので、どうしていいか分からず。」

「え？あぁ、あのことね。もう気にして無いから。大丈夫だよ。

あの時は、ハヤテ君がいなくなっちゃうと思ったから。

でも、今もこうして一緒にいたりできるでしょ？」

「・・・そうですね。じゃ、じゃあ、今日はだけは、こうしていいでしょうか？」

ハヤテが歩の手を盗った。

「えっ！？あ、あの・・・手、手・・・」

突然すぎる行為に歩は同様を隠せない。

そして、無言になる。

「西沢さんの手、暖かいですね。」

歩はそれに応答する余裕が無い。

ーーーーえ？何々？今、私ハヤテ君と手を繋いでる？ーーーー

下を向き、恥ずかしさを紛らわそうとしていたら、

「きゃっ！」

歩が段差に躓き、転びかけた。

その瞬間ハヤテが

「危ないっ！！」

体制を崩し、ハヤテがぐっと体ごと抱き寄せた。

歩はギュっと瞑っていた目を開けた。

するとハヤテの顔が予想以上に近くにあった。

何かがおかしい。

近すぎると言うより密着していた。

気づくのに3秒ほどかかった。

・

・

・

ーーーーーーーーーーーーーーーえええええええっっっっっ！！！！

ーーーーーーーーーーーーーーー

歩は驚愕していた。

二人の口が重なっていた。

歩はすぐにハヤテから離れた。

「あ、あの・・・その・・・ハヤテ君？ごめんなさい。」

何をいっていいのか分からない状態の儘で歩は謝った。

「えっ？あの・・・大丈夫です。それより、西沢さんは大丈夫でしたか？怪我とかありませんか？」

歩のことを第一に考えるハヤテ。

「うん・・・。だ、大丈夫だよ・・・」

「そうですか。良かった、西沢さんに怪我が無くて。」

そう言うと歩の手をもう一度取った。

「では、次はどこに行きましょうか？」

何事も無かったかのように、ハヤテ言った。

しかし、歩の頭の中は、さっきのハプニングのことで溢れていた。

「・・・あの、西沢さ？もしもし？」

「へ、あっ！はい！！何でしょうか？」

「いえ、西沢さん、何かボーっとしていたようなので・・・あの、もしかして本当は痛む場所があるんじゃないですか？

だめですよ、無理をしちゃ？
今日は、西沢さんが僕のお嬢様なのですから。
ね、歩お嬢様？」
」
「あ、歩お嬢様？わ、私が？」
「はい。」とニコリと返事をした。
その後、歩が少し落ち着いたところで二人は公園を出た。
特に行く当ても無いのでとりあえず二人は街に向かうことにした。
「西沢さん。そろそろお腹が減りませんか？」
「え？・・・もうお昼が過ぎてるんだね。」
「では、レストランでも探しましょうか。」
「そうだね。私、お腹ペコペコなんだ。」
「実は、僕もなんですよ。」
そんな付き合い始めて間もないカップルも様な
会話を弾ませ二人はレストランに向かう予定だった。

二人は、街に近づき大きな通りにいた。

幸せそうに道を歩く二人。

しかしその幸せを裂くかのように、残酷なＭｏｉｒａ（運命）は

突如訪れた。

「ねぇ、ハヤテ君。あの猫、道路に出て行きそうだけど

大丈夫かな？」

歩が心配そうに行った。

「そうですね。ちょっとこっちに連れて来ます。」

そういうと猫のほうに向かった。

「ほら、おいで。」

ハヤテが猫を抱き上げようとその瞬間に猫が飛び出した。

道路には１０ｔトラックが走っていた。

「危ない！！」

ハヤテが助けようと勢い良く飛び出すと、猫は驚いて走る速度上げた。

幸い猫は助かったようだった・・・が、しかし

ーーーーーーーーーーーキキィィッッッッーーーー！！！！！！
！！！ーーーーーーーーーー

・

・

・

トラックのタイヤが鈍い音を立て、止まった。

その先には、血にまみれたハヤテがに転がっていた。

歩は何が起こったのか、理解できなかった。と言うよりもしたくなかった。

「・・・い、い、いやぁぁ！！！！」

その絶叫は天（そら）高く響き、狂乱の調べを奏でた。

無造作に置かれた人形のようにハヤテはピクリとも動かない。
まるで、屍のように・・・
黒の預言書は改竄を許さない。
全ては予定調和の内。
灼け付く刻(とき)を送り、凍える瞬間(とき)迎えた。
何人がこの世界で罪を犯さずに生きられのであろうか。
例え、黒の歴史から逃げるべく術があったとしいても
其れはほかの歴史によって捉えられてしまう。
何故なら、それがＭｏｉｒａ（運命）だから。
不愉快な叙事詩(うた)と共に
緋色の歯車は廻り始めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5068h/

記憶の彼方

2010年10月16日00時04分発行